間に当院で血液培養を採取され、その陽性の結果が判明する前に死亡した症例を抽出し、後方視的に検討を行った。
【結果】 対象患者は9名で、平均年齢は72.0歳、市中発症例は5例、院内発症例は4例であった。血液培養陽性化までの平均期間は2.0日であった。診断名はfocus不明の菌血症5例、肺炎1例、腹腔内感染症1例、皮膚軟部組織感染1例、肝膿瘍1例であり、検出菌は*E. coli*が4例（うちESBL産生菌が3例）、*C. albicans*が2例、*K.pneumoniae*が2例、*P.aeruginosa*が2例、*E. faecalis*が1例、α-*Streptococcus*が1例、*Campylobacter* spが1例であった。経験的治療のミスマッチは4例で認めた。
【考察】 経験的治療のミスマッチがなかった症例において、いずれも早期の血液培養および経験的治療が開始され、良好な初期対応がなされていたが、感染カテーテルの抜去や膿瘍のドレナージといったsource controlが不十分な症例が認められた。一方、ミスマッチがあった症例では、腹腔内感染症での緑膿菌や腸球菌、皮膚軟部組織感染での腸内細菌やESBL産生菌を考慮する必要性が示唆された。今後は症例数をより増やしてさらなる解析を行う予定である。

P1-5.
MALDI-TOF MSを用いた血液培養陽性ボトルからの直接菌種同定法の検討

（社会人大学院博士課程4年微生物学）
○米谷　正太
（微生物学）
大楠　清文、松本　哲哉

【はじめに】 血液培養は、血流感染症が疑われる患者の診断と治療に大きく影響する重要な検査であるため、より迅速で正確な結果報告が必要となるが、従来の血液培養検査では、菌種同定結果の報告は血液培養陽転後早くても24時間を要する。近年、マトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析（MALDI-TOF MS）を用いた菌種同定法の実用化により、従来法に比べ迅速な菌種同定結果報告が可能となった。今回、3種類の検体の前処理法を用いMALID-TOF MSによる血液培養陽性ボトルからの直接菌種同定(直接法)の有用性の検討を行った。
【材料と方法】 血液培養陽性ボトルにおいて、単一菌種が検出された195検体（グラム陽性球菌（GPC）92検体、グラム陰性桿菌（GNR）72検体、グラム陽性桿菌（GPR）20検体、酵母用真菌（YLF）11検体）を対象とした。検体の前処理には、① MALDI Sepsityper kit（Bruker Daltonics）② 遠心集菌 ③ 自家製サポニン溶液の3法を用い、エタノール・ギ酸にて抽出を行ったものをサンプルとし、MALDI Biotyperを用いて測定を行った。Score Valueを用い1.700以上を同定可能とし、継代培養後のコロニーを用いた従来法の同定結果と比較し評価した。
【結果および考察】 直接法で菌種同定結果が得られ、従来法と菌種同定が一致した割合は、平均74.3%（内訳 GPC：66.0%, GNR：95.8%, GPR：46.7%, YLF：60.6%）であり、菌種により同定結果が得られる割合に差が見られた。従来法と誤同定となった割合は平均2%と少なく、機器特性として遺伝子的相同性が高く細分化できないとされる菌種であった。MALDI-TOF MSによる直接法は、一般細菌、嫌気性菌、酵母様真菌いずれが検体であっても、基本的な測定手技が同じであり、同定対象菌により方法を変える必要が無いため検査効率向上が可能である。また菌種結果報告までの時間が約30分と非常に短く、同定可能であった検体に関しては従来法と高い一致率を示していたため、迅速で正確な結果報告により、臨床における血流感染症の診断および治療に貢献できると考えられる。

P1-6.
シナプス小胞蛋白SV2Aによる神経伝達物質放出の調節

（細胞生理学）
○谷藤　章太、持田　澄子
（School of Pharmacy, University of Reading）
Vogl Christian, Stephens Gary J

シナプス小胞蛋白SV2は小胞膜に存在する膜貫通型蛋白であり、3種のアイソフォームが確認されている（SV2A, B, C）。我々は、培養上頸交感神経節細胞において、SV2Aリガンドである抗てんかん薬レベチラセタムがシナプス前終末の電位依存性カ